

開会のご挨拶

奥谷 浩一

みなさんこんにちは。札幌学院大学の奥谷でございます。シンポジウムの開会に先立ちまして、一言ご挨拶を申し上げます。

本日は大変寒い中、遠路はるばる札幌学院大学総合研究所主催の社会情報学部開設20周年記念シンポジウムにご参集くださいます、誠にありがとうございます。

社会情報学という比較的新しい学問分野で全国的なシンポジウムが、しかも、社会情報学の第一線で活躍されていらっしゃる伊藤守先生、岩上安身先生、増永良文先生、正村俊之先生の4人の講師をお迎えいたしまして私どもの大学で開催されますことは、大変光栄であるとともに、また大変ありがたく思っております。

今回のこのシンポジウムは「震災を乗り越える社会情報学」というタイトルがつけられておりますが、このテーマ自体大変面白く、時宜にかなったものだと考えており、その開催趣旨に大変共鳴いたしたところでございます。

今年3月11日に発生いたしました東日本大震災と東京電力福島第一原発事故、これは我が国のみならず、国際的にも大変大きな衝撃を与えた事件であります。そして事故を起こした当事者であります東京電力と、それから政府のその後の対応は、我々国民の批判的となった訳です。爆発の後、核燃料庫のメルトダウンを認めたのは、かなり後になってからでありましたし、それから東京に降下したと言われる放射能、放射線の数値を、社会的混乱を避けるという名目で、半分の量に下げて報道するというようなことがあったり、多くの情報の隠ぺいとか、誤情報の伝達がありました。マスメディアを通じてマスコミに登場した学者たちも多くは原発推進派でありまして、例えばこういう表現を繰り返しておりました。「この程度の放射線の数値でただちに健康に影響が出る訳ではない」。こういうことを繰り返していたのです。しかし考えてみますと、こうした情報は、完全に誤りという訳ではありませんけれども、直接被ばくではなくて放射線の内部被ばく量を考慮しますと、人体にここまでは安全であるという基準を設けることは不可能に近い訳です。いかに少量とはいえ内部被ばくは20年あるいは30年経ってから恐ろしい疾病を引き起こすということを考えますと、こうした表現というのは極めて不完全であるだけでなく、国民の命にかかわるという点で極めて危険で無責任な情報の提供ということになる訳であります。そういう訳で、今回の災害と事故は政府、地方自治体、関係企業のリスク管理の在り方を問いかけただけではなくて、正しい情報とは何か、不完全な情報または誤情報あるいは偽情報をどうすれば見抜けるか、そうした批判的な力をどう身につけるか、そうするためには何が必要か、そういう問いを突き付けましたし、さらにメディアの倫理とか、いわゆるメディアリテラシーという、そういう諸問題を含めて、実に多くの教訓と課題を我々につ

きつけたと私は考えています。

そういう意味では、本日のシンポジウムはこうした諸問題を議論するのにまさしくタイムリーであり、絶好の機会であります。このシンポジウムが社会情報の正しいあり方と、正しい伝達の仕方を議論して、今後の日本の社会を導く多くの実りある成果をあげられますよう、そして社会情報学の未来が明るいものでありますよう、心からお祈り申し上げて、私の挨拶にかえさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。